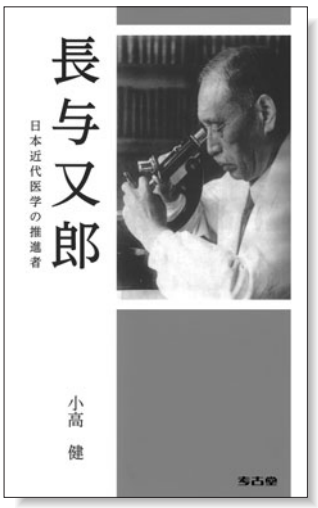
BOOK 書評



『長与又郎 日本近代医学の推進者』

小高　健　著

2012年12月23日　初版第1刷発行

長与又郎は明治11年4月6日東京神田に生まれ、肝臓癌にて昭和16年8月に死去された。その間、東京帝大の総長、伝染病研究所（後に東京大学医科学研究所）、癌研究会、国立公衆衛生院、結核予防会、日本癌学会のすべての総長か会長、所長を務められた稀代の人物である。又郎の父は、内務省衛生局長を務めた方で、祖先をたどると何代にわたり、大村藩の代々の藩医を務められたご家系である。又郎自身は、ツツガムシ病の権威であると同時に日本の癌研究の病理の歴史を作った病理学の大家であったということが本書を読まれた方にわかるであろう。明治から大正、昭和にかけての日本が近代化をまっしぐらに進んだ黎明期に活躍されたということが十分知れる本である。

私自身は北里研究所にて研究機関を過ごし、東大医科研にも腰かけがてらかよっていた経験があるため、本書の前半を占める北里研究所と伝染病研究所との争いや、インフルエンザワクチンはこの当時はウイルスであることは知られておらず、インフルエンザ菌のワクチンであったことなど非常に興味深く、とても面白く読ませていただいた。また、最後に御身体を病理解剖されたのが、私の所属する大学の祖である病理の緒方知三郎先生であったのを知り、この書評を書くことになった縁かもしれないと感じた。五・一五事件の際の日記などは、緊迫した雰囲気を感じた。本書の後半は総長としての仕事が中心となる。この中では、特に、大学の自治を守るといった一貫した態度に感銘を受けるかたも多いだろう。現在、文部省や厚労省がすべてを決定している現状が嘆かわしく思えてくる。結核予防会の会長が厚生大臣であることなど、組織を作るということは大変なご苦労があったと推察される。さらに、伝染病研究所、癌研究会、国立公衆衛生院、結核予防会などほとんどが国から予算がなくスタートしたことに、驚嘆させられた。

また、著者の小高健氏は長与又郎の跡を追うように、東京大学を卒業、伝染病研究所の所長を長く勤めあげ、発がんテーマに多くの仕事をされた人物である。特に、医学史の研究に多くの著書があるが、残念ながら本稿の脱稿を目前に肺がんにて死去された。ところどころ[ ]のままでの出版であるのが、この本が多くのかたに読まれるうえで、なんら支障にはならないことは保障したい。おそらく、日本のおける医学史を調べるうえで、貴重な本の一冊となるであろう。

東京医科大学　小児科学講座　准教授　河島 尚志

発行所：株式会社　考古堂書店
電話 025-229-4058　FAX 025-224-8654　定価：本体1,400円＋税

※［ ］は長与又郎の日記が判読不能であった部分である